『雨月物語』「浅茅が宿」の教材化
――文学史の授業構想、模索の一過程――

安　道　百合子

はじめに

アクティブラーニングという言い方にあらわれるような学習者主体の学びの形態が重視されるようになり、大学の授業も、講義系科目や専門科目が削減されたり、授業方法を見直される傾向にある。そんななかで本学でも「日本文学史」の授業は「文学史Ⅰ（上代・中古）」「文学史Ⅱ（中世・近世）」「文学史Ⅲ（近代）」と三科目あったものが「文学史Ⅰ（古典）」「文学史Ⅱ（近代）」の二科目に削減された。「Ⅰ」は上代から近世まで。およそ一五〇〇年あまりをかけぬけるわけである。稿者は「Ⅰ」を新たに担当するにあたって、文学史の授業をどのように構想しようかと考えた。[1] 本稿はその模索の過程であり、ひとつの試行の報告でもある。

一、授業「マンガワークショップ」との出会い

まずは少しまわり道となるが、構想のきっかけとなった授業について紹介しておきたい。

新たな文学史科目が開講されるほぼ一ヶ月前に、漫画家武富健治氏に集中講義を依頼した。当時の日本文学科[2]は、日本語・日本文学専攻、文芸創作専攻、地域文化専攻の三専攻からなり、文学研究を基盤としつつも創作の学びを一つの大きな特徴としていた。創作の学びでは、毎週開講のゼミ科目などで、村田喜代子氏をはじめ現役で活躍されている作家が指導にあたるが、それ以外に、ゲスト講師に集中講義を依頼しているのである。

さて、二〇一五年度の武富氏の「マンガワークショップ」という授業は、大きく三部から構成されていた。一部はマンガという文芸ジャンルの特徴と史的展開の講義、二部は『雨月物語』「浅茅が宿」のマンガ化の演習、具体的にはネーム作成とその制作物

の発表、そして三部は近代文学研究者などを交えてのシンポジウム、という構成である。とくに第二部は、マンガというスタイルの創作物の特徴を活かして、古典文学作品のマンガ化に挑戦するというもので、もともとマンガ創作のコースなどがない大学の演習としてはかなりハードな内容である。しかし、マンガに日常的に親しんでいる「いまどき」の学生は集中講義二日目はほぼ徹夜をして課題に取り組むという熱意を見せてくれた。

当時、武富氏は、ご自身の著作（『漫画訳雨月物語』）に取り組んでおられる最中で、まだ出版前であった。[3] したがって、学生たちは武富氏の作品をまだ見ていない状況での課題である。

まず作品を読むところからスタートしたわけだが、現代語訳を参考にしながらの解読である。古典の授業ではないから、ここはそんなに深入りすることなく、現代語訳に助けてもらいながら理解し、場面分けをしたのちに、コマわりの作業となった。[4] 授業の詳細は別稿にゆずるとして、ここでは、本題のほうに立ち戻ろう。

授業をともに受講しつつ学生たちを観察して、私は以下のような感想を持った。

- 古典解読の手続きにおいて『雨月』とりわけ「浅茅が宿」には先行作品の影響が無視できない。従って、そういう授業と連動させるとより学習効果が高まるのではないか。
- マンガ化は、アウトプットの方法として有意義である。読解するだけでなく、要点をつかまなければならないし、絵に描くために普段古文を読むときには考えもしない服装や場面状況など時代考証をせざるを得ない状況におかれる。結果として、成立年代と切り離せない作品の特徴を意識するようになる。

このことをきっかけとし、後期科目の「文学史Ⅰ」では「浅茅が宿」の読解から入ることに決めたのである。「浅茅が宿」には『万葉』『源氏』『今昔』からの明らかな影響がある。[5] 時代・ジャンルを越える作品との関係性を切り口に、文学史を学ぶことができるのではないか、と考えたわけである。

ちなみに、武富氏のマンガ版はその後二〇一六年に出版された。完成した作品を拝見して再度、氏のマンガに教えられることが多かったことを付記しておく。たとえばあとがきに次のように書かれている。

雨月と言えば美しい女性、その恐ろしさが最大の魅力だという印象が一般に染み渡っているのです。／しかし、実はそういう話は半分にも満たず、多くは男を見据えて描かれた物語です。／しかも、男のかっこよさよりも、見にくさ、あざとさ、しぶとさなど、業の深い暗黒面をこそ取り扱っているのです。一見、優しさや強さを描いていても、それは空即是色で、弱さや調子良さ、頑迷さや執着の深さでもあることがしっかり裏付けられている。／このあたりは、さらっと読むとちょっとわかりにくくなっています。おそらくこれは当時の

出版物の読者層が、知識にはちょっと自信のあるような男性が中心だったことにあるのではないでしょうか。どの時代でもそうですが、当世批判はむしろ人気の「売れる」コンテンツです。しかしそれには条件があり、対象となる読者層に矛先を向けてはいけない。彼らが被害者として気持ちよく溜飲が下げられるように、彼ら以外のものだけを批判するようにせねばならないのです。ですから、秋成は、表面的には思い切り女性の浅ましさをこき下ろし、「最近の若い者」に嘆息してみせ、古き良き男らしさを持ち上げ、古風で美しい淑女を美しく謳い上げます。しかしそれら全てには、それとは真逆の裏があり、気付く人だけが気付けるような仕掛けを施しているのです。この多重性こそが、多くの作家に支持され、「近代文学の祖」と呼ばれる大きな理由となっているのかもしれません。

稿者は、古典のマンガ化というものは、現代に理解されにくくなっている古典作品をわかりやすくする手続きのひとつという程度の認識でいたが、武富氏の作品や授業を拝見してそんな甘い認識を改めざるを得ないと感じた。氏のマンガは、『雨月』の深い読解に基づいているにとどまらず、現代の読者に向けた現代の作品として新たな息を吹き込まれているのである。このことは、解説に千街晶之氏が、

封建社会による人間性圧殺への秋成の反撥が、作中の一見道徳的な結論とは別に、愛憎や執念に生き、死んでいった登場人物たちの活力ある像を生み出したわけだが、そういった登場人物の像は武富の迫力満点の絵によって見事に蘇ったのみならず、新しい解釈を注ぎ込まれることで現代に通用するキャラクターとして再生を遂げたと言えるのではないだろうか。[6]

と書かれてある通りでもある。また「浅茅が宿」に関して言えば、たとえば勝四郎の帰りを待つ宮木が貞操を守るくだりに女中が身代わりに犯されるという描写が加えられている。宮木の人物像については、従来の研究書では、けなげな良妻としての理解が多いことに照らして、[7] 武富説は、逆の見方である一方、本質を突いた解釈でもあると思われる。宮木の「純愛」は別の面から見れば「愛執（エゴ）」となるのである。

二、『雨月』から文学史をさかのぼる試み

文学史の授業といえば、一般的におこなわれているのは、各時代ごとに作品を抄出して、読解し、その文体やジャンルの特徴を知り、ひいては時代の特徴に及ぶといった、いわば文学史を輪切りにするような講義ではないだろうか。もちろん、授業者は、深い理解に基づいて授業されている場合が多いと思うが、学習者の立場からいえば、知識の輪切りを与えられているようなものかもしれない。各時代のエッセンス「点」であるところの情報をつな

いで「線」にするような学びは、時間的制限のある一授業のなかではなかなか難しいが、本来「史」の魅力であるところの躍動感を少しでも感じられるようにしたいという課題意識が私にはあった。結果、『雨月』を読解し、その過程で影響を与えた作品として『万葉』『源氏』『今昔』を取り上げることにした。時代も、韻文・散文という形態も、和文・和漢混淆文という文体も異なる作品が、同一モチーフの変奏という線でつながる。そんなことをぼんやりと考えたのである。実際の授業は、「浅茅が宿」の読解と、影響を与えた各作品との比較や考察をする前半（およそ7コマ）のあと、後半は、学習者がそれぞれ「私のヒーロー・ヒロイン」と題して、古典文学作品の何か一作品の一登場人物を選んで紹介するという展開とした。およそ八〇名の受講者がそれぞれ別人物を選ぶと、結果的に時代・ジャンルが多岐にわたり、人の発表を聞いて知らなかった作品に関心を持つという「おまけ」も加わったのではないかと思う。以下、本稿では前半のとくに『今昔』『源氏』を取り上げた部分について述べる。

まずは「浅茅が宿」の物語展開を確認する。武富氏がネーム作りに際して分けた一〇段落に添って要点をまとめておきたい。さらに、稿を進める便宜上、全体を〈A部〉～〈D部〉と四部に分ける。

【「浅茅が宿」の物語展開】

〈A部〉

① 下総国に、勝四郎という男がいた。物事に執着しない性格の男であった。

② 妻の宮木は美人で心がけもしっかりしていた。「秋には帰る」と言って夫は京に行く。

③ 戦乱の世となり、夫からは頼りもなく、宮木は悲しく歌を詠む、が贈る術も無い。

④ 宮木はひとり貞操を守って家にこもるが、関東一帯は戦乱の世の中に成り果てる。

⑤ 京で一もうけした勝四郎は八月に故郷に帰ろうとしたが、木曾の真坂で山賊に襲われすべてを失う。そのうえ戦乱の噂を聞き、故郷も焼けうせ妻も生きてはいまいと考え、やむなく京に帰る道すがら、近江で高熱を発す。

⑥ 武佐という場所で助けられた勝四郎はそのまま七年の年月を過ごす。ところが、畿内でも戦乱は続き京の近辺も騒がしく、疫病も流行。勝四郎はよくよく思案して帰郷を決意する。

〈B部〉

⑦ 荒れ果てた故郷で見慣れた松の目印を見つけ、寄ると家はもとのまま、灯火の火影が洩れる。咳払いをすると、中から「どなた」と声がする。

⑧ まさしく妻の声と知って、夢かと胸は高鳴る。名乗る勝四郎と、戸を開けた宮木の感動の再会。これまでのこと

を語り合って、ともに床についた。

〈C部〉

⑨ 明け方、勝四郎が、寒さと顔に落ちるしづくで目覚めると、雑草生い茂る荒れ果てた場所であった。妻の筆跡の墓標を見つけ、妻の死をさとる。

〈D部〉

⑩ 昔から住む翁から妻の最期を聞き、真間の手児女伝承を聞く。勝四郎はこらえきれず歌を詠んだ。下総国の商人が聞き伝えた話である。

下総国の勝四郎は都へ出かけたまま七年あまりを音沙汰なく過ごし〈A部〉、帰ってくると妻宮木が待っていて感動の再開〈B部〉、しかし、一転翌朝になってみると実は荒れ野で妻はすでに死んでいたことを知る〈C部〉。作品の解釈のゆれるところとしては、〈D部〉の存在意義に関してであろう。それまでの話とは無関係な真間の手児女伝承が語られ、末尾に全体を下総国の商人が聞き伝えた話であると結ぶ。

〈A部〉～〈B部〉への展開は、『源氏』「蓬生」巻の展開を彷彿とさせるし、〈C部〉まで含めての全体の構成は『今昔』「人妻死後会旧夫語」とほぼ重なる。〈D部〉にある真間手児女伝承は、もともと『万葉』歌に由来し、そこから派生した入水譚は平安期の歌物語や作り物語、ひいては中世王朝物語まで多くの作品に影響を与えている。そもそも「浅茅が宿」という題号は、荒れ果てた屋敷を意味し、悲恋の象徴的意味も担う語である。

三、『今昔』との比較を通して

まずは基本的な読解の手続きとして、『雨月』に影響を与えていることが明らかな『今昔』を読み、比較しつつ影響のありようを見定める。両者は〈A部〉～〈B部〉という感動のストーリーが一転〈C部〉で実は死んでいたという怪異譚としての展開はまったく同じで、類似の様相は全体にわたるわけだが、章句レベルの照応や、「喜」字の訓みに「うれし」をあてるなど訓読の一致も見える。

○『雨月』「浅茅が宿」

⑧ 正しく妻の声なるを聞きて夢かと胸のみさわがれて、…戸を明くるに、…夫(をと)を見て物をもいはで潸然(さめざめ)となく。……又よよと泣(なく)を、「夜こそ短きに」といひなぐさめてともに臥ぬ。

⑨ 五更の天明ゆく比、現なき心にもすずろに寒かりければ、…家は扉(と)もあるやなし。…庭は葎に埋れて、秋ならねども野らなる宿なりけり。さてしも臥たる妻はいづち行きけん見えず。狐などのしわざにやと…ここにはじめて妻の死(し)たるを覚(さと)りて大いに叫びて倒れ伏す。(8)

○『今昔物語集』巻第二十七　人妻死後会旧夫語第二十五

家ノ内ニ入テ見レバ、居タリシ所ニ妻独リ居タリ。亦人無

シ。妻男ヲ見テ、恨ミタル気色モ無ク、喜気ニ思ヘル様ニテ「此ハ何カデ御シツルゾ。何ツ上リ給タルゾ」ト云ヘバ、男…年来ノ物語ナドシテ、夜モ深更ヌレバ、「今ハ去来寝ナム」トテ、南面ノ方ニ行テ、二人掻抱テ臥シヌ。…長キ夜ニ終夜語フ程ニ、例ヨリハ身ニ染ム様ニ哀レニ思ユ。此ル程ニ暁ニ成ヌレバ、共ニ寝入ヌ。夜ノ明ラムモ不知デ寝タル程ニ、夜モ明ケテ、日モ出ニケリ。…日ノ鑭々ト指入タルニ、男打驚テ見レバ、掻抱テ寝タル人ハ、枯々ト干テ骨ト皮ト許ナル死人也ケリ。「此ハ何ニ」ト思テ、奇異ク怖シキ事云ハム方無ケレバ、衣ヲ掻抱テ起走テ下ニ踊下テ、「若シ僻目カ」ト見レドモ、実ニ死人也。[9]

一見してわかる明らかな違いは、『今昔』が漢字カナ文であることから生まれる印象の違いである。さらに、もっとも大きな違いは〈C部〉における『今昔』は「骨ト皮ト許ナル死人」の姿を白日のもとにさらすという展開であり、男はそれを目の当たりにしてとびあがる。こうした展開を支えているのが和漢混交文の迫力ある明朗な描写でもあるといえよう。学生たちからは「率直な表現で生々しい」「美談というよりホラー」「妻が待っているという期待がない（約束していない）のに、まさかの妻がいることで怖さが増す」などの感想が聞かれた。授業では『今昔』の成立時期や構成について講じ、登場人物が貴族階級だけでなく民衆に及ぶことや人間としてのエゴや愚かさが取り上げられることなども特徴として触れた。

鵜月洋氏『雨月物語評釈』は「本文と『今昔物語集』との関係はきわめて深い。… なんといっても話の輪郭や印象が一致していることが第一にあげられなければならない。」[10]と両者の関係の深さを述べつつも、

『今昔』の説話のモティーフと構成のことごとくが、物語の中に吸収されていたことがわかる。主人公を人妻とし、それが夫を待って果てるという基本的な構成、或いは男を待って焦がれ死んだ女の霊が形を現して男を迎えるという、女の性の哀れさを主題とした構想が、この『今昔』の説話と関係があったことは否定できない。／享保五年には…板本『今昔物語集』が刊行されており、（文章の一致は板本よりも書写本との一致のほうが多く書写本から直接構想をとったと考えるべきであるが―引用者まとめ）…板本は、話の結びを「年比の思ひにたえずして。魂のとどまりて逢たりけむ。あはれなる事なりとかたり伝へたると也」ということばで結ばれており、この話が当時、怖しさよりもむしろ「哀れなる」話として受け取られ、作者の説話解釈に近づいていたことが注目される。／このように考えると、「浅茅が宿」は構成ばかりでなく、女の性の悲しさを描くという物語の主題も、『今昔』から取っていたと考えていいだろう。

と、末尾の意義を一話の解釈につなげて主題を「哀れ」とまとめ

られた。この「女の性の悲しさ」の内実には「三貞の操というリゴリズムだけでは片付けられない愛欲のにおい」を読み取っておられる。

四、『源氏』との比較を通して

続いて『源氏』「蓬生」巻の文章を見てみたい。高貴な血筋だが醜女で「べにばな」（紅花／赤い鼻）の異名である末摘花という不名誉な呼称でよばれる姫君を主人公にした「末摘花」巻の続編ともいえる巻である。「末摘花」巻での古風で融通が利かないという性格付けが、「蓬生」巻では一途でけなげに源氏を待ち続ける美質として捉え直され、彼女の思いがかなう形で源氏と再会するというストーリーである。明らかな違いは、こちらは、生きて再会、みごとなハッピーエンドとなる点にある。しかし、「浅茅が宿」の〈B部〉再会にいたる場面には章句レベルでの一致が多く見られることは注目される。

○『雨月』「浅茅が宿」

⑦　此の時日ははや西に沈みて、…旧しく住みなれし里なれば迷ふべうもあらじと、夏野わけ行くに、…雷に摧れし松の聳えて立るが、…げに我が軒の標こそ見えつると先喜しきここちしてあゆむに、…門に立ちよりて咳すれば、内にも速く聞きとりて「誰ぞ」と咎む。

○『源氏』蓬生巻

形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうなるを過ぎたまふ。大きなる松に藤の咲きかかりて月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。橘にはかはりてをかしければさし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば乱れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、はやうこの宮なりけり。…中略…簾動くけしきなり。わづかに見つけたる心地、恐ろしくさへおぼゆれど、寄りて声づくれば、いとものの古りたる声にて、まづ咳を先にたてて、「かれは誰ぞ。何人ぞ」と問ふ。…声いたうねび過ぎたれど、聞きし老人と聞き知りたり。内には、思ひもよらず、狩衣姿なる男、忍びやかにもてなしなごやかなれば、見ならはずなりにける目にて、もし狐などの変化にやとおぼゆれど、近う寄りて、「…変らぬ御ありさまならば、…」と言へば、…「変らせたまふ御ありさまならば、かかる浅茅が原をうつろひたまはではべりなんや。…[11]

『源氏』との章句レベルの一致は、「浅茅」「なごりの雨」「松」など、象徴として機能する風景描写が点描されることにより、まさに古典たる『源氏』の世界を呼び起こすはたらきをしている。それは、全体の雰囲気の違いが逆にあぶりだされることにもなる。物語展開に即して言えば、けなげな女性宮木のイメージと再会への期待が大きくなったところで、大きく予想を裏切るわけで、二次創作の醍醐味といってもよいだろう。学生たちの感想

にも「源氏は敬語、風景・情景描写が多い」「霊という表現がない」など表現に関する気づきが目立った。前掲『雨月物語評釈』は、具体的な一致の指摘とともに『源氏』引用の効果を次のように述べる。

作者は「蓬生」の文章を重ねることによって、文章のイメージを重ねていたばかりでなく、末摘花のイメージの上に宮木を置くことによって、源氏を待ち暮らす末摘花のイメージから更に宮木の心情の意味を明確にし、作品のモティーフとして浮び上がらせている。…『源氏物語』の面影を重ねることにより、物語の構想そのものは、著しく古典化されている。これが、古典の情趣的イメージを併せることによって古典がもつ普遍的な契機を表現のうちに併せて取り、物語自体の自律と完結を図ろうとする作者の意図によるものであったことは、いうまでもない。このことにより、構想の原型となった『今昔物語集』にないものが補われ、説話的構想の物語への醇化と昇華が図られていたと考えていいだろう。

さて、平安期の『源氏』からの影響がみられる所以は、『雨月』の成立時期に即して考えると、直接的には、近世国学からの影響が考えられよう。中村博保氏は、作品の様式的特性として『雨月』が『英草紙』『繁野話』にならったものとしたうえで、題号の命名法の斬新さに着目され、次のように解説された。[12]

考えられることはひとつしかない。すなわち、明和期における加藤宇万伎との接触にはじまる国学・古典学の影響である。明和三年の加藤宇万伎入門以前から、秋成は小島重家を通して契沖の学問や歌学に接していた。秋成の私淑した五井蘭州にも『勢語通』などの和学があった。そして何よりも『雨月物語』自序において、虚構のそら物語の世界的大作として『水滸伝』とともに『源氏物語』をあげていることが示唆的である。／「英・繁」二書に傾倒し、模倣につとめながら、それと決定的にちがうのは、加藤宇万伎らとの接触を中心に、秋成が体得した国学的発想、すなわちわが国における物語の伝統の、それなりの自覚であった。それは具体的には『雨月物語』の和漢混淆文体のなかの、和文的修辞というスタイルの獲得となって現れた。各編のタイトルの斬新さは言語としての、新しい和文脈の発見によって生み出されたのであった。

また、加藤裕一氏は、「浅茅が宿」の和文体に注目され、秋成の場合、和歌の勉学はそのまま国学研究へと連続しているわけで、この時期を明和二年の頃とし、宇万伎入門を明和三年と考えると、この時期は秋成が浮世草子作者として、明和三年・四年と立て続けに二作品を世に問い、一転して、明和五年に読本『雨月物語』を創作するという時期にぴたりと重なってくる。その意味で、作家秋成の浮世草子作者から読本作者への転向時期を歌道入門期・国学への関心を抱く時期

と関係づけて考えることは可能であろう。そして、この時期に創られた『雨月物語』は、国学思想や和歌と深い関係を持っていると考えてもよいのではなかろうか。

と指摘されたうえで、和歌の出典をすべて整理され、

和歌の引用の数やその分布状態の平均的なことから、「浅茅が宿」は他の編とは大いに異なっている……引き歌の数のみならず。和歌の多くの引用・利用が「浅茅が宿」には顕著に見られるのであり、…「浅茅が宿」は和歌の世界と緊密な関係の下で創作されていると先ずは判断してよいようである。

と述べた。[13]

中古物語から近世読本への「史」は、七五〇年あまりの年月を隔てても、中世以降の物語に見える『源氏』享受の様相や中世近世源氏学の広がり、加えて近世国学との接点を媒介して線としてつながってくるとひとまずは言ってよいであろう。

おわりに

以上『今昔』と『源氏』とを取り上げた部分について述べてきたが、実は末尾の⑩段落の存在意義という大きな問題が残っている。直接的には『万葉集』巻三山部赤人歌四三一～四三三番、ならびに巻九一八〇七～一八〇八番歌との章句の一致が見えるし、さらに入水というモチーフを視野に入れると、『大和物語』の「生田川」「猿沢の池」に連なる入水譚の系譜を考えなければならない。これについては稿を改めて述べることにしたい。

文学史の授業が二年目を迎える折しも、リポート笠間にて「理想の『日本文学史』」という特集が組まれた。[14]大学の授業が大きく変化を求められるなかで、「史」をどのように教えるか、ではなく、どのように意識付け学生たちが自分で課題を見いだし考察を深める時間をいかに生み出すか、ということが求められているのであろう。現状は模索の途上であるが、きっかけを作るという意味では、あえて影響関係のある作品をとりあげることには一定の意味があるのではないかと思っている。

学生たちの感想で重要と思われたのは、印象批評の域ではあるものの、『今昔』から「ホラー」要素を、『源氏』から「コメディ」要素を読み取っていることである。作品のにおいを感じること、言葉による表現に触れたときにその本質をつかまえることは、情報があふれる現代を生きるスキルとしてなかなかに重要ではないかと思う。

追記

本稿は、平成二十八年度山口県高等学校教育研究会国語部会研究大会（平成二十八年十月二十日　於山口県セミナーパーク）において「同一モチーフの類想・変奏―『雨月物語』「浅茅が宿」を糸口に―」と題して発表したものと、一部重なりがあることをお断りしておく。

注

(1) 大岡信氏「あなたに語る日本文学史　古代・中世篇』(1995　新書館)、北川智子氏「ハーバード白熱日本史教室」(2012　新潮新書)などに刺激を受けた。

(2) 現在は改組され、五つの専攻から成る「人文学科」となった。旧「日本文学科」の学びは、現「日本文学・文芸創作専攻」と「地域文化専攻」という二専攻におおむね受け継がれている。日本中の大学で文系学部が軽視される傾向が続いているなかで、さいわいに本学は「文学部」を存続させている。「日本文学・文芸創作専攻」は、旧来の文学研究の学びと文芸創作の学びの融合を目指すところに特色がある。

(3) 武富健治氏『漫画訳雨月物語』(2016　株式会社ＰＨＰ研究所)

(4) 講義のなかで配布資料として使用したのは以下の通り。高田衛氏・中村博保氏　校注・訳『完訳日本の古典　雨月物語　春雨物語』(1983　小学館)の訳文の抜粋。木越治氏監修・岸田恋氏画『マンガ雨月物語』(1990　河出書房新社)の木越氏解説文。

(5) もともと『雨月物語』は中国白話小説の影響を色濃く受けていることが指摘されているが、たとえば森田喜郎氏『上田秋成文芸の研究』(2003　和泉書院)は、秋成文芸の意義について論じるなかで、「浅茅が宿」は、「愛卿伝」を主としながら、それに『伽婢子』『万葉集』『源氏物語』『今昔物語集』などの日本の古典をおりまぜて、前述のように作者なりに宮木の讃美という独自の世界をつくりあげた一篇である。」と規定する。以下、本稿では、『雨月物語』『源氏物語』『今昔物語集』『万葉集』の各作品名を『雨月』『源氏』『今昔』『万葉』と略してあらわすこととする。

(6) 千街晶之(文芸評論家)「古典に新たな生命力を宿す試み」(『漫画訳雨月物語』解説)

(7) 前掲(5)引用の森田喜郎氏は、作品の主題について、重松毅氏『秋成の研究』(1971　文理書院)の「主人公宮木の純情一途の性情を描き出した」とする説と、植田一夫氏『雨月物語の研究』(1988　桜楓社)の「悲劇」ととらえる説とを紹介したうえで、「宮木の純情さを強調」した物語とまとめた。

(8) テキストは、中村幸彦氏・高田衛氏・中村博保氏　校注・訳　新編日本古典文学全集『英草紙　西山物語　雨月物語　春雨物語』(1995　小学館)より引用した。

(9) 『今昔物語集』テキストは小学館・新編日本古典文学全集より引用した。

(10) 鵜月洋氏『雨月物語評釈』(日本古典評釈全注釈叢書　1969　角川書店)より引用。ただし同書「あとがき」によると「浅茅が宿」の解説部分は中村博保氏が執筆している。

(11) 『源氏物語』テキストは小学館・新編日本古典文学全集より引用した。

(12) 前掲(8)の中村博保氏解説。

(13) 加藤裕一氏『上田秋成の思想と文学』(2009　笠間書院)

(14) 「リポート笠間　No.61」(2016　笠間書院)